



中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

平成30年2月6日発行 通算第75号

沖縄大会を終えて

全日音研沖縄大会副実行委員長 沖縄支部長 山里 望 (那覇市立首里中学校長)



「ハイサイ、グスーヨー、チャーガンジューヤミシエーガヤーサイ」(こんにちは、みなさんお元気ですかー?) 平成29年度全日本音楽教育研究大会全国大会沖縄大会(総合大会)が多くの皆さんの参加のもと大変有意義な大会となりましたことに心から感謝し、感動を共有できたことに大きな喜びを感じております。

「つなげよう未来へ、伝え合おう 音楽・チムグクル」を大会主題に掲げ、約2年の準備期間を経て本県音楽教育研究会約60年の歴史の中で初となる全国大会の準備・開催にあたり、本県音楽教育に携わるすべての者が一体となり、より強く太い絆で結ばれたことがこれからの学校における音楽教育の発展に資すると確信しております。

これもひとえに、全国大会誘致に全力で取り組んで頂いた諸先輩方、無謀と知りつつ本県音楽教育研究会を信頼し、全国大会(総合大会)開催に賛同頂きました全日音研役員の皆様の先を見通したご決断の賜と衷心より感謝申し上げます。

学校教育における音楽教育が、変化の激しい時代を生き抜く次代を担う子どもたちに大きな糧となり、より豊かで潤いのある夢と希望に満ちた社会へと繋がることを願い、お礼といたします。

「イチャリバ、チョーデー」(めぐりあったすべての人は皆兄弟)「マタンメンソーレ」(またのお越しをお待ちしています。)

和歌山大会に向けて

全日音研和歌山県音楽教育連盟 副会長 藤範 登志美 (和歌山市立城東中学校 教頭)



平成30年度全日本音楽教育研究会全国大会は、紀州・和歌山県の県庁所在地である和歌山市で開催いたします。和歌山県は木々の緑、海の青、くだもののオレンジに彩られた自然の恵み豊かなところで、また、高野山や熊野古道は近年パワースポットとして注目されており、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されています。今大会の会場となる和歌山市は、万葉の昔「若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る」と詠われた風光明媚な和歌の浦や徳川御三家の居城だった和歌山城を抱く歴史のある街です。和歌山城は、築かれた山の形が、虎が伏しているように見えることから、

別名、虎伏城(とらふすじょう)と呼ばれています。今回会場校となっている伏虎(ふっこ)義務教育学校は、校名にその名を冠したお城の天守閣を望むことができる場所に平成29年4月に開校された新しい学校です。

今大会のテーマは「ひらく・のびる・ひびきあう」～ときめく学びのある音楽の授業～です。本大会では、楽しい音楽活動を通して子どもたちの意欲が広がり、学びあうことを通して、子どもたち一人ひとりが音や音楽と豊かにかかわる姿を求めて、ご参会の皆様とともに研究を深めて参りたいと存じます。公開授業は小・中学校あわせて7本を予定しております。全体会では、和歌山市出身の東京藝術大学学長でヴァイオリニストの澤 和樹氏による記念講演を予定しております。

私たち一同、平成30年11月8日(木)、9日(金)の大会にむけて更に研究を深め、皆様と共に充実した時間を過ごすことができる大会となるように努める所存です。皆様のお越しを心からお待ち申し上げます。

Contents

- P 1 沖縄大会を終えて 山里 望 / 和歌山大会に向けて 藤範 登志美
- P 2～3 沖縄大会講評
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 臼井 学 氏
- P 3 中学校部会総会
- P 4～5 沖縄大会《中学校部会》 公開授業レポート・ワークショップ・記念講演
- P 5～6 沖縄大会 記念演奏・Information

発行

全日本音楽教育研究会 中学校部会
東京都杉並区堀ノ内 1-3-1
杉並区立東南中学校内
会長 風見 章

◆ 講演評 ◆

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 白井 学 氏
日時：平成29年11月2日（木） 10:05～
場所：沖縄コンベンションセンター



私は、本大会に向けて昨年度6月の県大会、今年1月の指導案検討会、今年度に入ってからは6月の県大会に参加させていただきましたが、参加させていただく度に研究の内容が深まり、また先生方の意欲が高まっていることを感じました。

このような大会を開催することは、通常の仕事だけでも十分に忙しい先生方にとって時間的にも精神的にも負担になる面はあろうかと思いますが、この大会をきっかけとして授業改善を図り、子どもたちにとってより意味のある授業を展開していきたいという先生方の思いが、本大会までの取組を支えてきたのではないかと考えております。

中学校部会では「伝え合う音楽 感じよう音楽 とともにわかちあう授業づくり」の主題のもと、実践的な研究を進めてこられました。大会冊子には、主題に迫るために3つの視点が示されていますが、ここでは、【視点1】「主体的・協働的な学びの工夫」の中にあります、「見通しや課題意識をもたせること」について少し触れさせていただきます。ここで注目したいのは、「もたせる」言い換えれば「もてるようにする」という立場で書かれている点です。つまり教師の手立てによって、「生徒が自ら学習の見通しをもったり課題意識をもったりできるようにする」という立場で書かれています。これは、教師が生徒に見通しを示したり、課題を与えたりすることとはまったく異なるものです。例えば、「この題材は〇〇をして、〇〇について考え、〇〇のような活動をして〇〇ができるようになる題材です」と教師が授業の見通しを生徒に説明し伝えること、また「今日は〇〇について学習しましょう」と教師が、課題を一方向的に提示することはあまり難しくありませんが、見通しや課題を生徒が自分で捉えていくことができるようにすることは容易ではありません。しかし、これがなければ「与えられたことを素直に行えばよい」という受け身の生徒を育ててしまうことになりかねません。

そのような意味において、この【視点1】から私たちは重要な示唆をいただけたと考えております。

それでは昨日の公開授業で、私が拝見させていただいた場面から感じたことについて触れさせていただきます。創作の山田先生の授業です。

「テーマに基づいて自作の旋律を生かしてグループで小曲を創ろう」という授業でしたけれども、ここで先生が、「テーマが決まらなかったら後で考えてもいいですよ。」と子どもたちに投げかけます。これは大変重要な投げかけであったと思います。あるグループでははじめ、「アクティブ（活発な）」というテーマを書いております。この時に子どもたちは「さてどうしようかな？」という感じになっていましたが、先生とやり取りをする中で、子どもたちは「沖縄の音階を使いたい」ということを言っていました。そして先生が、「どんなリズムが琉球っぽいかな」と投げかけ、そして子どもたちが知っているいくつかの音楽を口ずさみながら「琉球音階にするなら沖縄のリズムの方がいいんじゃないかな」とつぶやき、そこからもう一度テーマに帰った時に、「テーマを変えた方がいい」、つまりもう少し自分たちの意図に切り込んだ具体的なテーマにしていこう、ということで子どもたちはテーマを変えていきました。創作の授業では、テーマは音から発想され、そのテーマを音によって表現することが大事だと思います。音と関わりのないテーマの中でどのような音楽を創ろうとしても、子どもたちは、なかなか音楽で表すことはできません。その部分を先生が適切に発問し、適切なやり取りの中で子どもたちの学習を方向付けていくことを学ばせていただきました。

歌唱の大山先生の授業では、「花の街」を教材とし、8分休符や、フォルテ、クレシェンド等の記号に着目しながら、8分休符なしで歌ったり、8分休符ありで歌ったりしながら、「作曲家は、詩を読んでその思いを音楽で、記号で、楽譜で、きちんと表しているんだよ」と投げかけていました。これは中学校の学びとして、楽譜に着目して実際に歌い、その効果や作者の意図に思いを巡らし、そこから自分の思いや意図を生成していくという、中学校の創意工夫の学習として非常に適切な支援をしていただいていたと思っております。「楽譜はあまりわからないかな」と思ってしまいがちですが、そこに着目することで子どもたちの思考は促され広がっていく、そんな場面を見させていただきました。

器楽の宮城先生の授業です。グループ学習のボードのところに「どんな曲にしたい?」、「合わせてみよう」、「できるかな?」、「今度はこうしよう」ということが円のようになって書かれていました。これは、創意工夫の過程の中で、子どもたちが、必要感のある技能習得ができる、こういった学習のプロセスを示しております。創意工夫の過程で技能を習得する、その技能の習得がまた次の創意工夫につながる、このプロセスを大切に提示の中で、子どもたちは表現を追求している、こういったところから学ばせていただきました。

鑑賞の仲地先生の授業です。「なぜオルティンドーには楽譜がないのか」と問いかけ、さらに「谷茶前も楽譜は後からできたんだよね」、「民謡はどのように伝えられてきたのかな」、などと問いかけ、子どもたちは「親から子へ伝えられた」、「口伝えだったんじゃないか」、「聴いて覚えたんだな」などと言っていきます。このように、音楽の伝承方法に視点をあてて、民謡という音楽の存在を考え、谷茶前を例にして、自分事として考えていく、こういった流れを巧みに授業の中で構成しておりました。「楽譜は音楽を残すための大切な手段の一つではあるけれど、そこから音そのものは伝わらない。その人その人の感性や環境などによって、変化し続けながら人々に伝わる。このことは、音楽が生きていることを子どもたちが感じ、またその音楽を生かしているのが私たち人間である。」こういったメッセージをこの授業から子どもたちは確かに受け取ったのではないかなと感じております。

私たちの研究や研修は、授業がなければ、またそこに子どもの姿がなければ成立しません。公開授業にあたり様々にご理解ご協力いただきました関係校の校長先生はじめ、教職員の皆様、保護者の皆様、そして何よりも慣れない環境の中で日頃の学習の成果を発揮し生き生きと音楽と関わる姿を見せてくれた児童生徒の皆さんに心より感謝を申し上げます。また、このような素晴らしい機会を設定していただきました大会長の安次富 功先生、実行委員長の我那覇 隆三先生をはじめとする実行委員の皆様、授業者の先生方に心より敬意を表するものでございます。

本大会のご成功にお祝いを申し上げますとともに、ご参会の皆様の一層のご活躍をご祈念申し上げて講評とさせていただきます。ありがとうございました。



平成29年度 全日本音楽教育研究会全国大会（総合大会） 沖縄大会

◆ 中学校部会総会 ◆

日時：平成29年11月1日（水） 14:00～14:45

会場：浦添市てだこホール 市民交流室



中学校部会総会は、関東地区副会長、真武 公司先生の開会の言葉で始まりました。

風見 章部会長の挨拶、沖縄県支部長の山里 望先生の歓迎の言葉に続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の臼井学先生よりご祝辞をいただきました。その後、荒川徳子事務局長より、6月に江東区文化センターで行われた全国理事会の報告、志村誠一郎調査部部長より今年度の調査報告、退会役員の方々へ感謝状贈呈が行われました。

最後に北海道支部長の横山 学先生より前年度大会（函館・道南大会）の謝辞と、和歌山県音楽教育連盟副会長の藤範 登志美先生より次回大会（和歌山大会）の紹介が行われ、近畿地区副会長、小牟田 啓先生の閉会の言葉で中学校部会総会は幕を閉じました。

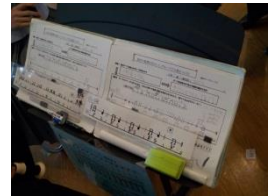


◆公開授業レポート◆

日時：平成29年11月1日（水）

会場：浦添市てだこホール（大ホール、市民交流室）

研究主題 『伝え合う音楽 感じよう音楽 ともにわかち合う授業づくり』



【歌唱】第2学年

題材名 「日本の歌の美しさを味わい表現しよう」

教材名：『花の街』『夏の思い出』

指導者 宜野湾市立宜野湾中学校 教諭 大山 めぐみ

「作詞・作曲者の思いを理解し、曲にふさわしい表現の工夫をして歌う」という目標に基づき、グループ活動を中心に授業が進められた。「クレシェンド＝だんだん強く」と機械的に工夫するのではなく、その裏側にある「作者の思い」を捉えさせようと「8分休符から始まる理由」を考えるなどしてグループで試行錯誤していた。

「ていんさぐぬ花」から「夏の思い出」「花の街」へと導き、「日本の歌」のもつ美しさ、行間を読むことや背景を知ることによって歌詞を理解し自己のイメージを広げ、思いや意図をもって創意工夫する学習につなげていた。「花の街」に込められた平和への願いを受け止め、主体的に表現しようとする生徒たちの姿が印象的であった。



【創作】第2学年

題材名 「和音の音を使って旋律をつくろう」

教材名：生徒作品 「My Melody」

指導者 浦添市立港川中学校 教諭 山根 かなみ

パッヘルベル作曲の「カノン」の和音進行からは様々な作品が生まれている。そのことに気付かせ、個々の生徒が和音の音をもとにアルトリコーダーで旋律をつくり、リズムを変化させ、グループで小曲にまとめる創作の授業であった。まず、提示された5つのリズムパターンを使い、1人4小節の旋律をつくり4人でつなぎ合わせて1曲にする。次にグループでテーマを決め、そのテーマに合うようにリズムを選び、ワークシートに記入する。実際に演奏して旋律の流れを確認する。きめ細かく授業計画がなされ、生徒たちはルールにのっとり創作活動を行っていた。

次時にグループ発表するとのこと。生徒たちが選んだテーマがどのように表現されるのか楽しみである。



【鑑賞】第2学年

題材名 「郷土や世界の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して鑑賞しよう」

教材名：「谷茶目」ほか 世界の諸外国の音楽

指導者 うるま市立具志川中学校 教諭 仲地 綾子

沖縄県には、民謡やエイサーなど、郷土の音楽を大切にしながらも時代に応じて変化させ、継承してきた音楽文化がある。それを基盤として、音楽と人々の暮らしを関連させながら、そのよさや美しさを感じ取って鑑賞する実践であった。本時では、モンゴル民謡「オルティンドー」を鑑賞し、個人で気付いたことをワークシートにまとめ、グループで意見交換し共有した。そして、この曲が生まれたモンゴルの地域性や人々の暮らしについて知り、理解を深めていった。その後、「ヨーデル」と「オルティンドー」を「谷茶目」と比較し、音楽の特徴について、共通性や相違性を整理する。生徒たちからは活発に意見が発表され、音楽の多様性について関心の高まりを感じた。



【器楽】第2学年

題材名 「それぞれの楽器の特徴を生かして、パートの役割を感じ取りながら合奏しよう」

教材名：「ていんさぐぬ花」

指導者 南風原町立南星中学校 教諭 宮城 千枝美

「ていんさぐぬ花」は、歌詞が10番まであり、子守歌、教訓歌として歌い継がれてきた沖縄を代表する曲である。この曲をアルトリコーダー、三線、ギターの3つの楽器で、10名程度のグループで合奏する。各グループにはグループリーダー、司会、表現リーダーの3つの役割があり、仲間と話し合いながら協力して合奏をつくりあげていた。また、グループごとに録音機材が用意されており、自分たちの演奏を録音して客観的に聴きテンプやパートのバランスについて意見が出され、より充実した活動になっていた。

次時は、グループごとに工夫した点について思いや意図を伝え、演奏を発表するとのこと。「ていんさぐぬ花」の多様な表現をぜひ聴いてみたいと感じた。



◆ ワークショップ ◆

日時：平成29年11月1日(水) 15:15~16:45
会場：浦添市てだこホール



- W1 「組踊」：沖縄の伝統芸能「組踊」の楽しみ方（講師 嘉数 道彦 氏）
- W2 「三線」：体験してみよう～沖縄の三線～（講師 山内 昌也 氏）
- W3 「合唱」：一歩先の合唱へ～いつもの教材とあらためて向き合い～（講師 富澤 裕 氏）
- W4 「授業づくり」：これは楽しい！『鑑賞』と『音楽づくり』をリンクさせた授業づくりの実際（講師 高倉 弘光 氏）

ワークショップは、沖縄の伝統芸能「組踊」や「三線」を実技体験したり、いつもの合唱曲をより深く読み解き豊かな音楽表現に感動したり、授業づくりの新たな考察を学んだりするなど、どれも有意義で充実した内容であった。

◆ 記念講演 ◆

日時：平成29年11月2日(木) 10:50~11:40
会場：沖縄コンベンションセンター劇場棟
講師：新垣 勉 氏（声楽家）



新垣 勉 氏は、1980年より「平和とは何か」「生きるとは何か」ということを伝えるべく、本格的に歌と講演活動を始めた沖縄出身の声楽家である。

今回の記念講演では、「声、言葉、響き、ハーモニー」というキーワードをもとに、ご自分の生い立ちや歩んできた人生、音楽や平和への思いなど、様々なお話をしてくださいました。また、お話の合間に聴かせてくださる歌声は美しく、深く澄み渡り、会場全体が大きな感動に包まれた。

「オンリーワンの人生を大切に」というメッセージは、一人一人の胸に深く刻まれ、温かい気持ちになれた時間であった。



◆ 記念演奏 ◆

日時：平成29年11月2日（木） 11：55～12：45
～沖縄（うちなー）の音楽～

会場：沖縄コンベンションセンター劇場棟
※◀ ▶は演奏曲目

<プログラム>

1. 合奏 特別支援学校合同演奏

《肝高の詩（きむたかのうた）》 平田 大一 作曲

沖縄県立沖縄高等特別支援学校	指導者	安次嶺 めぐみ
沖縄県立美咲特別支援学校	指導者	石 川 誠
沖縄県立美咲特別支援学校はなさき分校	指導者	大 城 敦 子
沖縄県立宮古特別支援学校	指導者	横 田 博 美



2. 合唱 那覇市内小学校合同演奏

《ていんさぐぬ花》 照屋 岳史 編曲
《同声合唱のための沖縄のうた「風がはこんだふしぎなお話」より
大村御殿 ～ じんじん》 シバミツ 作曲

那覇市立古蔵小学校	指導者	長 田 恵
那覇市立石嶺小学校	指導者	工 藤 か や
那覇市立天久小学校	指導者	下 地 なを美



3. 郷土芸能 沖縄県立南風原高等学校

《かぎやで風（かじゃでいふう）》 古謡 古曲 古典舞踊
《若衆ぜい（わかしゅうぜい）》 古謡 古曲
《嘉手久（かーでいーくー）》 古謡 古典 振付：川田功子
《稲刈唄（いねかりうた）》 作詞：泉国夕照 作曲：宮良長包
振付：川田功子

沖縄県立南風原高等学校 郷土芸能部 指導者 具 志 幸 大



4. マーチング うるま市立具志川中学校

《SUPER KAGIYADE》 神山 大樹 編曲
《Okinawan Journey》 花城 昌己 編曲

うるま市立具志川中学校吹奏楽部 指導者 中 里 展 仁



Information

全日音研中学校部会ホームページも是非ご覧ください。 <http://zennichionken-jhs.jp/>